

名称の変遷にみるわが国の男性看護者の歴史

—近代から現代までの名称に関する文献的考察—

寺山範子、塩野悦子

宮城大学看護学部

キーワード

名称 男性看護者 性役割

legal name, male nurses, gender role

要 旨

看護は女性性と結びついて発展してきた歴史があり、男性看護者が身近になったとはいえその歴史を知る機会
は意外に少ない。今回、近代以降に登場した男性看護者の名称を中心に1970年代から1990年代までの看護系学術
雑誌について文献検索を行った結果、近代以降の男性看護者は戦争と精神医療という2つの目的から誕生し、名
称にシンボライズされながら変遷してきたことがわかった。精神医療において期待された「物理的な力」は男性
看護者の独自の役割とみなされるようになったが、それを担うことの負担感や違和感も生じさせ、看護の本質と
のあいだにある齟齬感は現在にまで影響を与えている。

History of Male Nurses

—A Study of Education and Legal Name System from Meiji Era to Contemporary Japan —

Noriko Terayama, Etsuko Shiono

Miyagi University School of Nursing

Abstract.

Male's participation during the Meiji Era in the nursing profession originated from demands for
nurses on battle fronts and in psychiatric hospitals. These origins were influential in deciding the
future roles and duties of males within the nursing profession; specifically, physically demanding duties.
This trend can still be observed in contemporary Japan, thus causing young males to question their
role within the profession.

はじめに

男性看護者数は1981年から1992年の10年間に看護職全体の約2%から3%へ増加した¹⁾。稀少であることに変わりはないのであるが、この増加の傾向は社会の動向と無関係ではない。男女雇用機会均等法の成立、高齢社会を意識した福祉職への志向、ジェンダーフリー教育への動き、その他さまざまなサブカルチャーの影響などは、男性看護者に対する社会通念にも影響を及ぼしていることは間違いなく、また看護教育が専門職看護としてのカリキュラムを整えてきていること、専門職としての特性を明確にしてきつつあることなども大きな要因となっていることが考えられる。

男性看護者が少数であるということは、看護サービスの受け手や臨床看護の現場で働く同僚、そして看護教育の場にさまざまな問題を投げかけている。看護系大学における男子学生は増加傾向にあり、講義・学内演習・臨地実習で身近にかかわることが多くなった。それにもかかわらず男性看護者の歴史について知る機会意外に少ないのが実状である。

看護を学ぶことと男性であることとは自己の中では自然のことであるかもしれないが、社会慣習はまだまだ障害となっている。また看護は女性と関連しながら発展してきた歴史があり、看護教師（臨床指導者を含む）による知識の伝達過程においては、その伝達のなかに社会の支配的な性規範体系や常識がかくされている。良くも悪しくも起こりうる特別視や期待などは、男子学生が学習するうえで利益とはならない。

男性看護者側から見える看護の歴史的経緯や風景は、男性看護者にとっての事実である。女性看護者からは見えない事実があることの証明とも言える。男性看護者の歴史を男性看護者側からの見方で知することは、日常の看護教育場面における知識の伝達過程に内在するかもしれないバイアスを気づかせるだろう。

今回、近代以降の男性看護者はいつごろから、どのような目的で、どのような名称のもとに存在していたのか、男性看護者自身は役割をどのように受けとめているのかに関する研究について、1970年代から1990年代にわたる看護系学術雑誌について文献検索を行った。MEDLINEにて文献検索を行ったところ、調査9件、調査以外の解説・総説・その他が21件であった。収集した文献のなかから今回は3文献を用いて、男性看護者の名称の変遷に着目し、変遷過程と養成・教育制度、法制度を関連させて年代順に整理した（表1）。また1970年代・80年代・90年代に企画された男性看護者の

鼎談3文献から、男性看護者とその役割について彼らが困難や疑問と認識している発言部分を抜粋し、男性看護者の認識の変遷過程を整理した。

I. 名称の変遷

(1) 看病人

看病人³⁾の「看病」について古語大辞典をみると、仏教用語としては弘仁3年の官符に用いられており、その意味は「僧が病人のために加持祈祷すること」²⁾とある。また一般用語としては「人を看護すること」²⁾とあり、これも古くから用例があり、東大寺正倉院文書には「看病仮」（官吏が親の病気を看護するために願い出る休暇）²⁾などとして、「看病」が用いられている。また、「近世には、自分自身を看護する意から、病気の保養、療養の意」²⁾に用いた例もあるとのことである。新村氏は仏教医学と看護について調べるなかで、「看病禅師」による看護を看護のはじまりとして指摘している。それによると「養老年間には治療行為を行う僧尼に随行した看病禅師と呼ばれる僧侶が存在し、その役割は病を看ることが第一の仕事」³⁾であったという。看病禅師は彼らの持つ「【持戒・看病・清行者】の面が期待されて制度化（宝亀3年、770年）され、14世紀中頃まで存続していた」⁵⁾とも述べている。このように用例からみると「看病」という言葉には古い歴史があることがわかる。

1860年代に男性看護者が再登場したとき、このような歴史的な男性看護者の存在を引き継いだかたちで「看病人」という名称になって登場したとみることができる。異なっている点は、「僧はもともと基礎教養として医学（医方明）を学ぶべき者とされており、湯薬に関する知識を有していた」⁵⁾とのことであるが、近代になって登場した「看病人」は傭人であり特別の教育は受けていないことがあげられる³⁾。また登場の理由は、日常生活における看病という目的からではなく、軍事における男性看護者の必要という目的によっている点でも違いがある。

(2) 壮兵看病卒

看病人という名称は、1873年に「軍衛生制度設備」において「壮兵看病卒」という名称に変更になる³⁾。

「壮兵」の「壮」という字は、辞書によると①壮（さか）んなること、②大なること、③人の齢の30歳に達したること、の意がある。さらに字源では、「①大いなり（雄大）、②つよし（強）」⁶¹とあり、強さの強調であることがわかる。したがって「壮兵」とは強い兵隊のことである。

看病「卒」の「卒」については、辞書では①雑兵、足軽、兵卒とあり、字源でみると「①しもべ、やっこ（隸人・僕）」「従卒」、②下級の軍兵「兵卒」・・・⁶²とあり、以上をあわせて「看病卒」を解釈するならば、軍事における下級の軍兵（「兵卒」）で、しかも役割は看病をする者のこととなる。男性看護者の軍事における機能がさらに明確化されている。名称からみると傭人という立場から軍隊の一員と定まったこともわかる。

(3) 救 助 人

救助人という名称は、1879年に東京府癲狂院（現在の都立松沢病院）に「救助人」と称される男性看護者が誕生していることにはじまる⁷¹。精神医療の未発達時のことであり、その役割は暴れる人を押さえつけて手錠や足錠をかけることなど、力で押さえつけることにあった。すでに男性看護者として登場している「看病人」や「壮兵看病卒」という名称とはまったく別の名称になっているのは、軍事との関連がまったくないところからの誕生であったことによる。

「救助人」になるためには体格検査と事務的尋問以外は条件がなく、「救助人」に採用されても精神病についての知識を教育されることもなかったため⁷²、名称のみで何の資格があるわけでもない。

(4) 看護補員（看護人・看護手）

1880年には、戦時における看護主員と救療看護にあたる者のための「看護補員規則」が制定され、そこで男性看護者は「看護補員」という名称に変わる³¹。戦争における受傷・治療に関係するのが職務の内容である。採用にあたり選定条件もあったとされる³²。

「看病」から「看護」に変化していることが注目されるが、1877年に太田雄寧が「看護心得全」⁸¹を著しており、そのころから言葉の使い方が「看病」から新しく「看護」へ変わりつつあっ

たのかもしれない。

(5) 看 護 卒

1883年、「徴兵看病卒取扱手続き」によって軍事における男性看護者という位置づけが明確になる³³。すでに新しくなった「看護」と軍との結びつきを示す「卒」という組み合わせが示す意味は、「看護する下級の軍兵」である。

1877年の「看病卒」から「看護卒」に変化して、最も重要なことは教育の制度化である。同手続き第9条には「第1教科（基本体操術・生兵徒歩教練・看病卒心得書）、第2教科（人体造構の概略・三角包帯用法・看病卒背囊入諸品・患者運搬法）、第3教科（救急要法・包帯通術ほか）を教習し6ヶ月間で卒業させる」³⁴ことが定められている。「看病」から「看護」へという名称の近代化は看護教育の近代化でもあったことがわかる。

(6) 看 護 人

日清戦争を前に、日本赤十字社（以下「日赤」と略）は開戦を想定しての救護員派遣準備を行っている⁴¹。救護員とは「『医員』『調剤員』『看護人』『看護婦』によって編成された医療チーム」⁴²のことで、「看護人」という名称はここからはじまっている。同じ軍事における機能とはいいながら、「看護卒」とは異なる「看護人」という名称がついているのは、出自が軍隊ではなく日赤であること、つまり軍とは立場の異なる民間人であるという差異をあらわしているとみることができる。

この以前に、軍隊の戦時救護活動にすでに欧米をモデルとして「看護婦」（女性）を参加させようという動きがみられ、日赤では看護婦養成を開始している。開戦以前には日赤では「看護人」養成を行っていないが、戦時救護の中心的担い手として戦地や軍用船内での救護には男性の看護人が陸軍から求められ、「看護人」の募集と採用にいたっている⁴³。即戦力として「陸軍看護手の経歴をもつ者」「医学生」「篤志者」という選抜基準が設けられたりしているが、船内救護員である「看護人採用手続き」においては学歴条件はなく日常生活の読み書き・計算能力、性格特性「性質順良」の者となっている⁴⁴。養成期間も支部の事情により様々で、いづれにしても数日間から1ヶ

月の速成教育であったという⁷¹⁾。

日赤での「看護人」の誕生からすこし遅れて、精神病院においても従来の「救助人」から「看護人」へという近代化がおきている⁷²⁾。1901年に呉秀三氏によって開放的精神医療がはじめられると、精神病院における看護教育に変化がみられる。同年に、「精神病院の看護長が東京帝大の看護学習所に派遣されて、男性の看護教育受講者第1号」⁷³⁾となっている。ついで1903年には、「東京巢鴨病院普通看護法講習」⁷⁴⁾によって採用基準、養成期間ともに本格的な教育がはじめられた。これは院内講習の形態をとったものである。制度が本格化したことを示すものは、なんといっても採用基準（勤務評価、筆記試験、体格検査に合格した者）と養成期間（3年間）であろう⁷⁵⁾。

精神病院における名称の変更を示すものは、1906年の「東京府看護婦（人）養成規則」に「看護人」という名称が認められることである⁷⁶⁾。さらに1915年の「看護婦規則」においては、附則で「男子たる看護人は本令の規定を準用す」とあり、看護婦試験を受けたのちは「看護人」という有資格者として認定されることとなった⁷⁷⁾。ここにいたって、男性看護者と軍とのつながりを暗示するものはなくなったということになる。

「看護人」としての活躍の期間は、次に名称が変更されるまでの約50数年間と長く、この間の看護人養成は精神病院に付属して設置された養成所を通して行なわれてきている。それらの養成によってどれだけ男性看護者が活躍してきたのかは、1947年の全日本看護人協会の設立、また1960年の日本精神科看護協会の設立などにその実績をみてとることができる。一方、教育に関しては、1951年の「保健婦助産婦看護婦学校指定規則」⁹¹⁾では看護教育の内容は男女とも同一であったものが、1956年に改訂されて、男子学生の産婦人科実習を精神科実習に読み替えることとなった。この読み替えは1987年まで継続した。

(7) 看護士

1915年に全国的に認知された「看護人」という名称は、1968年の「保健婦助産婦看護婦法」⁹²⁾の改訂で「看護士」に名称変更された。

「看護士」の「士」とは辞書によると、①官位・官禄を給せられる人、支配階級、上流人士、

官僚階級、②武士、さむらい、③人格や識見の立派な人、賢人、④一般に男子とある。また字源を見ると、「①さむらい、四民の首たる者『士農工商』、②官吏の総名、③学徳のある者、④裁判官、⑤もののふ（武夫）、⑥をとこ、男子の尊称」⁶¹⁾とあり、いづれにしても歴史的に様々な意味を含んで用いられてきていることがうかがわれるが、一般に男性を強調した尊称としてみてよいだろう。

「看護士」の職域は1987年にカリキュラムが改正されるまで、産婦人科実習の精神科実習への読み替えによって、どうしても精神科にかかる比重が大きかったことは否めなく、精神病院の場が大きかった。

Ⅱ. 男性看護者の認識の変遷

(1) 活動の場と男性看護者の役割

明治以降、男性看護者は戦争と精神医療において登場した。抗精神薬による精神医療が行われるのは1950年代以降であり、暴れる患者に対応するにはそれに見合う「力」が必要だった。軍事場面での必要には「看病人」が、精神医療においては「救助人」がつけられて現実に機能してきた。その積み重ねの歴史は、男性看護者ならではの役割りというものを自他ともに許すところとなり、骨肉化させることに貢献してきた。

「救助人」の登場から100年後、名称が「看護士」と改められてから10年後、現場で働く男性看護者たちによる鼎談のなかでその役割を総括しているが、昔も今も男性看護者の役割に本質的な差異が認められないというのが彼らの結論である。

「独自の役割とは、物理的な力による抑圧であり、絶対数の不足する医師の役割を隠れた存在として受け持ち、逃げ出さないための心理的抑圧を加えること」¹⁰⁰⁾で「物理的な力を要求される仕事は、もちろんそれがすべてではないけれども、ひとつの枝葉としてあることは否定できないだろう。」¹⁰¹⁾と。

しかし「物理的な力」を行使することについて、男性看護者たちはさまざまに思い悩んでいることがわかる。

「物理的な力を行使するという役割を全面的に否定することはできないと思う．．．。」¹⁰²⁾と、力の行使はやむを得ないこととして受けとめるが、しかし実際の行使に際しては、「（物理的な力を望まれたとき）

そういう場合に、悲しい思いをしながら行く。なんでばくは、ただその患者さんを押さえつけて連れてくるだけの役割としてしか見られていないのか。オレはいやだぞと拒否したいと思っても、要請されれば行かなければならない。」「物理的な力がどうしても必要というときに、男の看護者が呼ばれる。そういう役割が男性看護者だけに押し付けられてくるから苦悶してしまう。」¹⁰⁾と言う。

精神医療での活動に慣れたことは、時の経過とともに次のような発言も生む。

「精神科はやりやすい」「患者の人間性を無意識のうちに阻害しているのではないか。だから女性患者にも看護士が生理的なケア、尿路感染症のケアをしてもできるのでは。患者さんのほうも抵抗がないのでは。」¹¹⁾

精神医療における活躍が強い影響を及ぼしていた年代には、男性看護者の役割を「力の行使者」とみる傾向にあったが、活動の広がりとともに役割は多様化する。小児看護領域で活躍する男性看護者による鼎談においては「父親としての役割」があげられている。

「お父さん子の場合とか、母親に虐待された子どもなどは顔を輝かせて反応する。」「思春期の男の子と男同士の話ができる。看護婦といるときとは全然ちがう。」「子ども病院では父親としての役割を意識して関わる必要があるのではないか。」「患者の父親からいろいろ相談されることもある。お父さんも看護士のほうが話しやすい、気安さというのがあるのではないか。」¹²⁾

一般病棟での活躍によって、「メカに強い男性」は高度医療に対しての役割があるという捉え方にシフトする。

「医療のハイテクノロジー化による興味を示すのも男が多い。そういう特性は生かされるべきだ。」¹³⁾と。

これら役割の多様化は活躍の場が精神医療から一般病棟に変わったことに伴う自然の変化とみることができる。男性看護者の役割の捉え方という本質のところでは、男性特性論を肯定する価値意識がのぞいている。

(2) 男性看護者と女性看護者の相互作用

精神医療において男性看護者の役割とされた「物理的な力」の行使は、一方的に男性看護者が行使するというよりも、それを期待する女性の態

度があって、その結果によるところではないかという問いかけがある。女性も男性看護者を安易に利用しているのではないだろうか、と。「物理的な力」の行使は、女性と男性看護者との間でお互いに期待し、応えるという暗黙の相互作用をとおして機能しているのではないかというのである。そこには、圧倒的多数の女性看護者に囲まれて、「男性看護者としてどのようにして自分を発揮しようか」¹⁰⁾と意識してしまう男性看護者の存在と、「そういうところでしか自分を発揮できない」¹⁰⁾と葛藤している男性看護者の存在が認められる。

一般病棟での活動が広がり始めると、専門職の同僚として女性看護者をみようとする発言がでてくる。

「看護に情熱を傾けて働いている看護婦と一緒に仕事をしていると非常に仕事がしやすい。女性とか男性とかでなく、プロ意識で働いている看護集団であるかどうかによって僕らの働きやすさが決まると思う。」「見よう見まねでできるような中身の仕事であれば、そういう仕事をやる男性は必要ないと思う。」「若い二十歳そこそこの女性の、結婚したら辞めますというような感覚でよいと思う。」「看護は女性の方も片手間じゃなくて、真剣に自分の専門職としての技術なり、学問なりというものの石積みをはじめて行くことが大切。」¹¹⁾

さらに性差を利用している女性看護者の言動を指摘する発言もある。

「看護婦のなかには『男の人だよ』『ほら看護士さんの前でいつまでも裸でいると恥ずかしいよ』とか、悪気はないのだろうが言う人がいる。あまり強調すると『男＝恥ずかしい』という感情が働いてしまい、それから先のケアがやりにくくなってしまう。」¹²⁾「危機的状況になると女性のほうが巧妙に性差を使い分けするところが看護の世界にはある。」「役割分担が歴然と出ているところと、性差のようなものがカメレオンのように巧妙に使われ、生かされているところと両方ある。」¹³⁾と。

(3) 社会習慣と男性看護者の困難

近代化と戦争を契機に、看護は女性の特性から生じるものであって、職業としてだけでなく、広く女性が身につけるべき素養とみなされるようになった。女子教育とはそうした女性の特性を述べるとともに家政一般の経営についての教育であっ

た。こういう社会環境のなかで、日本の近代看護は女性の性役割と強く結びついて発展してきた。

現代の看護の状況を見ると、すでに専門職としてのカリキュラムを整えてきており、「看護＝女性の特性・適性」を主張するのはすでに無理があり、主張すればするほど専門性の否定につながっていく。男性看護者が存在することの説明すらできないことになる。男性看護者たちは実際に働かなかで、「看護業務が専門職として確立されるには、まず女性でなければ看護業務ができないという概念を捨て去るべきだ。」「男子の特異性を強調しないと、女性の特異性をもまた強調されるべきではないと思う。」¹⁰⁾と、看護という職業と女性性とがもつ因縁に、現実の看護が釣り合っていないということを実感している。

男性看護者の少なさはなによりも認知度の低さである。

「看護師というのはまだ一般の人達には認識されない。看護師という仕事をいちいち説明しないといけない。」「まだまだ精神科というイメージがある。啓蒙する必要がある。」¹²⁾

「一般病棟に看護師が入ると、男が来たというだけでスタッフはびっくりする。」¹³⁾

そのようななかで、男性看護者は勇気をもって新しい分野を開拓する努力が必要だと思っているが、「社会習慣を無視することはなかなか困難」¹⁰⁾であるとも感じている。社会習慣というものは、日常生活の繰り返しのなかで無意識のうちにかたちづくられ、あたかもそれが自然のことであるかのように、暗黙の了解事項として人を納得させてゆく力をもつ。男性看護者による看護については、患者が女性である場合は患者の抵抗感があり、男性看護者自身もやりにくさを感じている。

「男性看護者が女性の患者さんをケアすることについてどう思うかといったら、気持ち悪いという意識が働くのは、当然だと思う。」¹⁰⁾「男性が女性の看護をしにくい。看護するほうもされるほうも。」「現実には患者のほうの抵抗が強い。」¹¹⁾

近年の発言からは男性看護者がこのような抵抗感をいかに解決してきたのかが表れている。

「看護の本質から言えば、性差は意識しなくてもいい。しかし性差があるのは歴然とした事実。業務には性差を持ち込む必要はないが、性差がないから何もかも一緒というのではなく、ある程度は配慮する必要がある。」

「排泄援助の場合、女性も男性患者には当然意識する。これは全く自然な人間本来の姿なのだから、超越することはできない。しかしそういう自然の特性はあるにしても、看護の仕事上の性による差異はほとんどないと思っている。」¹³⁾

ここには性差が看護という職業にどんな意味を与えているのかを考えようという方向への変化がみられる。

男性看護者は医師と並べてみたときに次のような思いも抱いている。

「患者さんはなぜ産婦人科医が男であっても素直に診てもらうかという、医者という権威をみているわけです。」「男性社会の権威構造に裏打ちされているところの医者をみる。」「ところが看護者というのは、医療の中ではやはり下積みとしてみられるわけで、そのなかでは女性は女性に看てもらいたいということて、男性が性を越えることはできない。」¹⁰⁾

医師＝権威＝男性のパターナリズム、看護＝女性というステレオタイプは、男性看護者にとって二重の拘束をかけることになっているようである。すなわち男性社会の中で、男性看護者の役割を考えていくということは、「力なり、政治力なり、今の社会体制のなかで温存されているものを排除していくべきところを、逆に強調していくことになる」¹⁰⁾というように、本来の思いとは逆方向に向かっていってしまう危険性をもつということである。

家計の担い手を男性に置く（基幹労働者）という捉え方は近代産業資本主義において成立し、女性の労働は家計の補助的労働とみなされてきた。男女雇用機会均等法成立以降の現在においてもその影響が継続していることは、日本の男女の賃金格差（約10：6）に如実に表れている。いわゆる女性等級の医療（三）にもとづく給与体系に対して、男性のライフサイクルへの配慮がないとして次のような発言がある。

「男子だから一生の仕事としてやっていくという期待がある。」「一般論として男性は職業を一生のものとして考える。」「一生の仕事として、家族を抱えたときを考えると複雑な心境になる。」「受け入れた病院側が、その看護師の遠い将来まで考えた設計が全くない。」¹¹⁾

「給料を高くしてほしい。看護婦と看護師の給料に差をつけるという意味ではなく、看護全体の給料を上げてほしい。」¹²⁾「看護はおもしろいとはいっても夜勤しなければ

生活できないという給料ではなく、生活を支えるだけのものがなくては。」¹³⁾

看護労働が女性によって担われてきたことは病院経営からみると都合がよかった。しかし男性が参入してきたことによって、性差を超える看護労働への正当な報酬について問いが出されているということである。

Ⅲ. 結 論

1970年代から1990年代にわたる看護系学術雑誌の男性看護者に関する文献検索を行い、そのなかから主として近代以降の男性看護者の名称・法制度・教育制度・役割の受けとめに関する6文献の検討を行った結果、以下のようなことが明らかとなった。

1. 近代以降の日本の男性看護者は、1860年～1870年代に、軍事における必要から「看病人」が、精神医療における必要から「救助人」が登場したことにはじまる。それらの名称は男性看護者が必要とされた理由を反映させつつ、時代状況の変化とともに変遷し、現在の「看護師」にいたっている。
2. 近代初期の男性看護者に求められた役割は、戦時における救護と、精神医療における「物理的な力」である。女性看護者の養成の開始、軍事における需要の通減などによって、活躍の場は精神医療の場へと移り、男性看護者の教育の近代化が進んだ。精神医療における活躍が続いたことは、「男性看護者独自の役割」について周囲の期待を生み、男性看護者自身にも内面化されることと結びついた。
3. 一般病棟での活動が広がると「男性看護者独自の役割」というよりもむしろ、「職業としての看護」のあり方を問う新たな問題が出現した。男性看護者にとっての困難は、女性看護者が恣意的に女性役割を利用することから生じる問題や、看護が女性によって担われてきた習慣に伴う社会心理的な問題—看護の受け手と看護者にとっての性差—、またこれまで女性看護者がかかえてきた問題—看護労働の賃金とそれが男性看護者に適用されること—でもある。

おわりに

今回は男性看護者の側から見える看護について、1970年代、80年代、90年代に企画された3つの鼎談における発言を採用したため、事実も部分的にならざるを得ず、解釈にも限界があった。しかし男性看護者の見え方は、女性看護者のみによっては表面化しにくい

問題や、その見方のなかにある社会の支配的な性規範体系や価値基準、社会習慣などの存在を明らかにするのに役立つ。今後は日常の看護教育場面において性差がどのように看護の本質に影響するのかを明らかにする必要があるとともに、看護を単純化して伝達することはできないという戒めとしたい。

引用文献

- 1) 日本看護協会出版会：看護関係統計資料集，1994.
- 2) 中田祝夫他編：「古語大辞典」，小学館，1983.
- 3) 山崎裕二：「近代看護士のなかの男性看護者(1)明治初年～10年代の陸軍と博愛社」日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要8号，p103-112，1995. 12.
- 4) 山崎裕二：「近代看護士のなかの男性看護者(2)日清戦争における日本赤十字社の看護」日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要9号，p79-88，1996.
- 5) 新村 拓：「死と病と看護の社会史」法政大学出版局，p184-188，1989.
- 6) 簡野道明：増補「字源」，角川書店刊，1995.
- 7) 北島謙吾：「わが国における看護師養成の歴史と現状」こころの臨床，1996. 3.
人」日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要9号，p79-88，1996. 12.
- 8) 吉川龍子：「『教育雑誌』（明治12年）にみる看護歴史と看護教育(1)，総合看護，1号，1992.
- 9) 看護六法
- 10) 座談会：特集「看護士の役割を考える『男性看護者に問われるもの』」，看護学雑誌，42/2，p156-168，1978.
- 11) 鼎談：「いま、看護士は... 男性ナースの生活と意見」，看護学雑誌，48/12，p1389-1395，1984.
- 12) 座談会：特集「一般病棟の看護士」小児看護大好き人間集合，看護学雑誌，56/7，p612-618，1992.
- 13) 座談会：特集「看護士をどう生かすか」，看護展望，17/4，p24-33，1992.

V. 参考文献

- 1) 藤野邦夫：特集「看護士の役割を考える」これからの看護士の役割，看護学雑誌，42/2，1978.
- 2) 矢野真二：特集「看護士の役割を考える」看護士成立の歴史的状況とこれからのあり方，看護学雑誌，42/2，1978.
- 3) 城下賢：特集「看護士の役割を考える」看護士としての意識向上と発展性を考える，看護学雑誌，42/2，1978.

- 4) 上村秀美：特集「看護師の役割を考える」地方個人病院に生きる看護師のあがき，看護学雑誌，42／2，1978.
- 5) 伊藤景一：特集「一般病棟の看護師」一般病棟における看護師の役割を考える，看護学雑誌，56／7，p 594－599，1992.
- 6) 中西孝彦：特集「一般病棟の看護師」看護師の道を歩んで，看護学雑誌，56／7，p602－603，1992.
- 7) 長野広敬：特集「一般病棟の看護師」働きやすい職場を築くために，看護学雑誌，56／7，p604－605，1992.
- 8) 高橋克則：特集「一般病棟の看護師」一般病棟に勤務して，看護学雑誌，56／7，p606－608，1992.
- 9) 江間由紀夫：「看護師 性別を越えた専門職としての期待」，こころの臨床アラカルト，15／1，p39－42，1996.
- 10) 波多野梗子他：「わが国における看護師の研究の課題と方向」看護研究，p85－95，1991.
- 11) 若松直樹：「看護職のひろがり」，こころの臨床アラカルト，15／1，p35－38，1996.
- 12) 小澤勲：「精神科医からみた看護師」，こころの臨床アラカルト，15／1，p29－33，1996.
- 13) 高橋美智子：「一緒に働く仲間としての看護師」，こころの臨床アラカルト，15／1，p25－28，1996.
- 14) 間曾富雄：「看護師としての私」，こころ臨床アラカルト，15／1，p21－24，1996.
- 15) 土曜会歴史部会：「日本近代看護の夜明け」，医学書院，1973.
- 16) J. A. ドラン：「看護・医療の歴史」，誠信書房，1978.
- 17) 脇田晴子：「ジェンダーの日本史(上)」，東京大学出版会，1994.
- 18) 脇田晴子：「ジェンダーの日本史(下)」，東京大学出版会，1994.
- 19) 神田道子：「『女性と教育』研究の動向」，教育社会学研究第40集，p87－107，1985.
- 20) 森繁男：「『ジェンダーと教育』研究の推移と現状－『女性』から『ジェンダー』へ－」，教育社会学研究第50集，p164－183，1992.